

## テラコッタで苔を飼育するプロジェクトの取材報告

2024年8月13日

苔は**維管束植物**です。根がないという意味です。葉で水分を吸収して光合成をします。根に見えるところは仮根といいます。仮根の強さが壁などに張り付く力を持っています。

シート状に育成したものをテラコッタに貼って育てる方法が一番簡単です。発芽する仕組みは、三つあります。①植物の胞子が飛んで目が出る ②最初からある葉の先端から新しい葉が育つ、③葉が枯れてしまったときに、茎から新しい葉が出で来る。③は種の保存という生命力によるものです。

苔を接着剤でテラコッタに貼り付ける方法もありますが、あまりお勧めできません。自然の有機物に科学的な有機物の接着剤をつけるということに抵抗感があり、見た目にも接着剤が残るのはあまり綺麗ではないからです。

新潟市中央区本町通 14 番地 3118-7 (025-223-4274) の「日本苔技術協会」に北川義一苔アドバイザーという師匠がいらっしゃいます。3 日間の合宿の勉強会が開催され苔愛好家の学びの場所として有名です。

### 【活動内容：HP から一部抜粋】

日本苔技術協会 (JMTA) はコケを育てることをテーマとして、コケの栽培技術を研究・普及し、コケの産業化を目指す事業家、愛好家の団体です。

土を選び、種を播き、水を注いで、環境を整えてやれば、コケは芽を出し、ゆっくりと成長し、やがて立派なコロニーを形成してゆきます。

コケ玉を作るためにコケをマット状にはがして採集してしまうと、元に戻るまで3年も4年もかかってしまいます。また、マット状にはがしたコケは、コケ玉に巻いても1年もしないうちに死んでしまいます。さらには、採集した名前の分からないコケの中には、貴重なものや、絶滅危惧種に指定されたものが混じっているかもしれません。

栽培されたコケは天然自生のコケとは比べ物にはなりません。どうぞ、自然を愛する気持ちを大切に、コケの乱獲や無闇な消費は避けて頂き、栽培されたコケをご愛用されますようお願いいたします。

日本苔技術協会はコケの栽培や移植など、コケに関する技術の普及を図る活動をしております

宮城県栗原市では、「栗原苔フェスティバル 2024」が開催されます。2024年10月26日(土)と27日(日)の二日間です。[「栗原苔フェスティバル 2024」を開催します！ - 宮城県公式ウェブサイト \(pref.miyagi.jp\)](https://www.pref.miyagi.jp/)

## 基本的な育て方のポイントです

### 容器の準備:

透明なガラス容器を用意します。蓋付きのものが湿度管理に便利です。

### 底材の敷設:

容器の底に杉のおがくずを敷きます。これは排水性を高め、苔の根が腐らないようにするためです。

### 半紙の使用:

杉のおがくずの上に半紙を敷きます。半紙は水分を保持し、苔の成長を助けます。

### 苔の配置:

スギゴケなどの苔を半紙の上に配置します。苔は直射日光を避け、明るい日陰で育てるのが理想です。

### 水やり:

霧吹きを使って2週間に1度程度、水を与えます。湿度を保つために、容器内の湿度を確認しながら調整します。

### 管理:

直射日光を避け、風通しの良い場所に置きます。苔が乾燥しないように注意しましょう。スギゴケは特に人気があり、テラリウムでの育て方も比較的簡単です。

### 【作り方】

回転式「イモ洗い機」に水を浸し、「半紙・杉のおがくず、苔」を入れて小さく粉にします。その後不織布でろ過します。※おがくずは10分程度熱湯で煮沸してから行います。水分をろ過した後、テラコッタに貼り付けて、落ちてこないように不織布でカバー(包帯巻きのように)します。仮根が張り付いた後は不織布を外して構いません。

仮根が「かたまり」になってコロニーを形成するまで時間がかかるので気長に育てるのがポイントです。成長を感じるまで、最低でも3ヶ月くらいかかります。1年間で2cmくらい伸びたらいい育ち方だと言えます。

苔は乾燥に弱いので、くれぐれも水分補給をお忘れなく。コロニーの苔は寄り添うように育ちます。断面を隠そうとして固まります。その結果下、下が枯れていくことがあります。

## 【コロニー形成と飼育のプロセス】

### 1. 発芽と定着

胞子の発芽: 苔の胞子が適切な環境（湿度、光、温度）で発芽します。胞子は苔の繁殖単位で、湿った場所で発芽しやすいです。

定着: 発芽した苔の幼菌は基質（地面、岩、木など）に定着し、初期の根（リスポイド）を伸ばします。これにより、苔がしっかりと固定されます。

### 2. 成長とコロニーの形成

成長: 苔の成長が始まり、葉が広がり、茎が伸びます。苔の体は細胞層が一層で、非常に薄いです。

コロニー形成: 苔は徐々に広がり、隣接する苔が連結してコロニーを形成します。この過程で苔は横に広がり、密集していきます。

### 3. コロニーの発展と下部の枯死

コロニーの発展: コロニーが成長し、広がるにつれて、中心部分や外縁部が厚くなり、より密に成長します。コロニーが大きくなると、新しい成長点が外側に現れます。

下部の枯死: コロニーが広がる過程で、内部や下部の古い部分が次第に光や空気、水分を得られなくなり、枯れていきます。この現象は、中心部の苔が周囲に広がることで、古い部分が栄養不足や乾燥などで枯れることによって起こります。

### 4. 枯死の進行

枯死の拡大: コロニーの下部が枯れると、その部分の苔は次第に分解し、微生物によって分解されます。枯れた部分は風化し、土壌に戻ることがあります。

新しい成長: 一方で、コロニーの外縁部では新しい苔の成長が続き、コロニーは周囲に広がり続けます。枯死した部分は自然に循環し、新たな苔の発芽や成長に貢献することもあります。

このプロセスは苔が成長し、繁殖する過程で自然に起こる現象で、苔の生態系においては正常なサイクルの一部です。

## 【福井県の越前焼の破片を台に育てる方法】

越前焼（えちぜんやき）は、福井県で生産される伝統的な陶器で、日本の陶芸の中でも歴史が深いとされています。以下に越前焼の特徴や歴史について詳しく説明します。

### 1. 歴史

越前焼の歴史は古く、約1,200年前にさかのぼります。平安時代に始まり、鎌倉時代には確立され、室町時代にはその名が広まりました。特に、室町時代の茶道の普及により、越前焼の技術や品質が高く評価されるようになりました。

### 2. 産地

越前焼は、福井県の越前市やその周辺で生産されています。特に越前市の「赤坂」地区や「瀬戸」地区が有名です。

### 3. 特徴

釉薬（うわぐすり）：越前焼の特徴のひとつは、自然釉や灰釉を使った素朴で温かみのある色合いです。釉薬の表面には、独特の「くすみ」や「しわ」が見られ、風合いが豊かです。

土：地元の赤土や灰土を使っており、土の質感や色合いが特徴です。土の成分が独自の風合いを生み出します。

形状：越前焼は、茶碗、急須、花器など、日常使いの器が多いですが、その形状はシンプルでありながら洗練されています。

### 4. 技法

素焼きと本焼き：越前焼は、まず素焼きで形を整え、その後釉薬を施して本焼きします。本焼きでは、窯の温度や焼き時間によって釉薬の色合いや風合いが変わります。

高温焼成：高温で焼成することで、焼き締めが強度が増し、耐久性が高くなります。これにより、使用するたびに味わい深い表情が出るのが特徴です。

### 5. 文化的背景

越前焼は、日本の伝統的な陶器の中でも特に茶道に用いられることが多く、茶碗や急須として高く評価されています。また、近年では現代的なデザインや機能性を取り入れた越前焼も増えており、伝統と革新が融合した作品が多く見られます。

### 6. 観光と体験

越前市では、越前焼の工房見学や体験教室が行われており、観光客が実際に越前焼を作る体験ができます。また、越前焼の展示や販売が行われるイベントも開催されています。

越前焼はその長い歴史と伝統を持ち、現在でも多くの人々に愛されている日本の陶器です。

## 【日本の六古窯のひとつの越前焼】

日本の「六古窯（ろっこよう）」は、古代から中世にかけて日本の陶磁器の製造が盛んだった伝統的な窯で、以下の六つが含まれます。それぞれの窯は、その地域で独自の技法やスタイルを持ち、今日でも高く評価されています。

### 1. 越前焼（えちぜんやき）所在地：福井県越前市

特徴：越前焼は、自然釉や灰釉を使用し、素朴で温かみのある陶器です。茶道との関連が深く、茶碗や急須が多く作られています。釉薬の表面には独特の「くすみ」や「しわ」が特徴です。

### 2. 信楽焼（しんがきやき）

所在地：滋賀県甲賀市信楽町

特徴：信楽焼は粗い土を使い、自然釉がかかった素朴な風合いが特徴です。素焼きの焼き物が多く、陶器の表面には自然の釉薬による独特の斑点が見られます。特に狸の置物で有名です。

### 3. 丹波焼（たんばやき）

所在地：兵庫県丹波市

特徴：丹波焼は深い色合いと重量感があり、素朴でありながらも高い芸術性を持つ陶器です。赤褐色や黒褐色の釉薬が特徴で、茶碗や花器などが人気です。

### 4. 備前焼（びぜんやき）

所在地：岡山県備前市

特徴：備前焼は、釉薬を使わずに焼き上げる「無釉」の陶器が特徴です。焼成中に自然に生じる「鉄釉」や「斑点」などが美しいとされ、茶碗や花器が有名です。耐熱性が高く、実用性と美しさを兼ね備えています。

### 5. 有田焼（ありたやき）

所在地：佐賀県有田町

特徴：有田焼は、白磁で知られる陶器で、精緻で透明感のある釉薬が特徴です。17世紀に始まり、特に青白磁や色絵が有名です。日本国内外で高く評価され、多くの輸出品があります。

### 6. 九谷焼（くたんやき）

所在地：石川県加賀市

特徴：九谷焼は鮮やかな色絵が特徴で、特に青、赤、緑、黄の四彩が代表的です。装飾性が高く、絵画的なデザインが多く見られます。花瓶や皿などの工芸品が有名です。

これらの六古窯は、それぞれの地域で独自の陶器の技術とスタイルを持ち、日本の陶磁器文化の重要な部分を形成しています。各窯の特性や歴史的背景を理解することで、日本の伝統的な陶器の多様性と深みを知ることができます。

## 【復活した越前焼のストーリー】

越前焼が一度衰退した理由には、いくつかの要因が考えられます。主な理由としては以下の点が挙げられます：

### 1. 生産技術の衰退

越前焼の生産技術や技術者の減少が、質の高い陶器の生産に影響を及ぼしました。戦国時代や江戸時代の初期には、戦乱や社会の変動により、陶器作りの技術が伝承されにくくなり、製品の質が低下しました。

### 2. 需要の変化

江戸時代には、特に有田焼などの他の陶器産地の製品が人気を集めたため、越前焼の需要が減少しました。特に有田焼の白磁や色絵が人気だったため、越前焼のような素朴な陶器は次第に市場での競争力を失いました。

### 3. 戦乱と経済的困難

戦国時代や江戸時代の初期には、地域の経済的な困難や戦乱が影響し、陶器作りが困難になりました。また、戦争や自然災害などの影響で、生産拠点や商業的な流通が打撃を受けたことも要因です。

### 4. 技術の変遷

陶器の製造技術が進化する中で、越前焼が古い技術やスタイルに固執していたため、新しい技術やデザインが求められる時代の変化についていけなかった可能性があります。

### 5. 産地の衰退

越前焼の主要な産地であった越前市やその周辺の地域も、経済的な困難や人手不足、技術者の減少などに直面し、陶器作りのコミュニティが縮小したことが影響しています。

### 復興の努力

越前焼は、20世紀に入り、地域の復興努力や技術の再生により、再び注目を集めるようになりました。近年では、伝統的な技術の保存や現代的なデザインの取り入れにより、越前焼は再び人気が高まり、多くの陶芸ファンに愛されています。再生には、伝統を守りながらも新しい価値を創造する取り組みが重要でした。

取材先：有限会社ビックアロー [moss shop 291] 三好 亮様

〒914-0141 福井県敦賀市苜生野 97 号 2 番地の 6 TEL.0120-33-1492 / 090-3297-2196

取材したお話を一次情報として記録し、不明点はネット情報を引用しました。一般ユーザーにある程度の概要が伝わるように加筆しました。